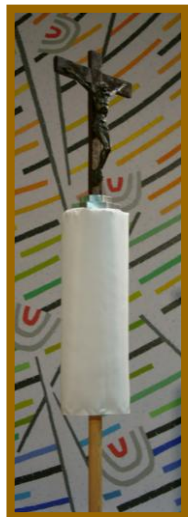


「風」と「命の息吹」のシンフォニー



「世の終わりがいつ来ると思う？」—ある日突然にこのように尋ねられ、そのことに全く興味がない私は「この地球から“驚嘆する人”“詩人の心”を持っている人”が消える日でしょう」と思わず答えました。—この古いやり取りを記憶によみがえらせたのは、5月15日私

ちが迎える「聖霊降臨」の祝日です。—ところで、「聖霊降臨」という言葉を読んだり聞いたりしてそれに対して「驚嘆する」人がはたしているのでしょうか。役所の書類の見出しのような表現を通して、「聖霊」と「聖霊の働き」のすばらしさと美しさが本当に反映され、その豊かさが伝わるのでしょうか。多くの人々は、「聖霊降臨」を単にほぼ「意味不明」の宗教的な専門用語としか見做してないのではないのでしょうか。私も、なかなかその表現に親しみを覚えることができず、その言葉からあこがれも夢も沸いてきません。



—確かに神の神秘を相応しく言い表す適切な言葉は人間にはありませんがそれにしても…。

* 耳もとでささやいている声が聞こえてくる…。竹林の中での風の歌を忘れたのか。

乾燥した地に雨が降り始めると、土から立ち上がる匂いを嗅いだことがないのか。ラベンダーの畑からそよ風が運んでくる香りに魅せられたことがないのか。—見てごらん。

曙に露の真珠に飾られるばらの花びら、昇って行く朝の日差しに撫でられて薄霧の中でそびえる山々、大海原に沈んでゆく夕日、宇宙の彼方まできらめいている星、時計の針のように回っている青い惑星。聞いてごらん。

勢いよく滑り落ちる沢のどよめき、流れ落ちる滝のとどろき、穏やかに海へ流れてゆく川のせせらぎ、大自然が奏でるシンフォニーを。

目を開けてごらん。

春の満開に咲く桜、夏のまぶしい太陽、秋に燃え立つ輝くもみじ、冬に白い布で地を包む雪。—赤ん坊の誕生、遊園地で笑いながらはしゃいでいる子どもたち、手をつなぎ楽しげに歩いている恋人たち、傷つけあった後、赦し合う男と女、工場で汗を流している労働者、美の火花を散らしている巧みの人。

気づいていますか。

助けを必要とする人に寄り添う人々、イエスの福音を証しするために辛抱強く勇気を発揮し続けている人々、終わりが近づいた人生において命の息吹を「アッパ」父なる神に静かに返す老人たち。

—それらは「神」(聖霊)の^{わざ}業の美しさとすばらしさの「しるし」と「証し」ではないでしょうか。誰にもまして優れた^{あか}「詩人」である神の「業」に驚き、それに対して^{すぐ}感嘆し、感動することができなければ、「聖霊」の存在と働きに気づくことができず、なおさらその働きに協力することができないのではないのでしょうか。

「聖霊よ、来てください。

あなたの光の輝きで、わたしたちを照らしてください。貧しい人々の父、恵みの与え主、心の光よ、来てください。

あなたは、まことの^{なぐさ}慰め主、わたしたちのやさしい友、心に安らぎをもたらす方です。

あなたは、わたしたちが疲れた時には^{いこ}憩いを、暑さにあえぐときには^{すず}涼しさを、うれいに沈むときには慰めを与える方です。まことの光よ、あなたを信じる者の心をくまなく照らしてください。

あなたの助けがなければ、人は^{こどく}孤独で、みじめなものです。わたしたちのけがれたところを清め、すさんだところをうるおし、傷ついたところをいやしてください。

わたしたちのかたくななところを^{やわ}和らげ、冷えたところを暖め、曲がったところを直してください。あなたにより頼むわたしたちに、天のたまものを授けてください。聖霊よ、わたしたちによいわざを行わせ、救いの道を無事に歩ませ、永遠の喜びを与えてください。」と。

「聖霊を求め」祈りであるこの「詩」を書いた人こそは「神の業」のすばらしさと美しさに気づき、驚嘆した人です。—



*「風」に由来している「霊」という言葉は、大自然と人類の春を思い起こさせる神の「命の息吹」をも言い表しています。生きておられる神は「業」を通して常に命を与え、すべてを新たにしようとしています。

「風は思いのままに吹く」(ヨハネ 3、8)ように神(聖霊)は今もさまざまな形で働き、今も私たちを通して「業」、特に「いつくしみの業」を行おうとしています。私たちはそのことに十分に気づき、それに対し驚嘆しているのでしょうか。そしてどれだけ神に協力するように私たちは心がけているのでしょうか。—

—^{かこ}過去の^{しゅうかん}習慣にしがみつki、ただ同じことばかり^{だせい}惰性で繰り返し、「信じる」と宣言していることに対して理解を深め、自分の信仰生活を振り返り、必要に応じて改めるように心がけなければ、事実上命の息吹である神(聖霊)の前にシャッターを下ろしてしまいます。—常にすべてを新たにしておられる神の命の息吹に強められなければ、私たちの信仰は^{ちっそく}窒息してしまいます。



—主日の感謝の祭儀の間に私たちはよく次の詩編を歌っています。「あなたの息吹を受けて私は新しくなる」と。(典礼聖歌集 6、7 番)

自分が足踏みをしたり、後退したりしているとすれば、それは神が「命の息吹」を吹きかけていないからではありません。それは自分がその息吹に合わせて呼吸しようとしていないからです。

—2 千年ほど前にイエスの言葉と行動に人々がたびたび「驚いていた」ように、私たちも神(聖霊)の「業」のすばらしさと美しさに気づき、それに対して驚嘆し、そして神の業に協力することができるように「新たに」身を引き締めながら聖霊降臨の祝日を迎えたいと思います。